

## マイノリティ アーティスト イン レジデンス 活動報告書

岩田 草平 (Prominority 代表)      コード番号:12-A-032

### 活動の内容・目的

私達 prominority は本プログラムの実践において、近代社会における自然と人間の関係に焦点をあて、現在も自然と密接した生活を営むインドの少数民族(サンタル族)、日本人が共同で作品を制作することで、本当に平和な社会のカタチを追求していくことを目指しています。

ディレクターの岩田は文化庁若手芸術家海外派遣員として 2008 年から 2 年間、その後、吉野石膏美術振興財団、ポーラ美術振興財団からの助成金、タゴール国際大学からの客員研究員ポストの提供を受けて、西ベンガル州サンティニケタンに滞在し、サンタル族の協力をえながら有機物濾過による浄水システムの設置、給水塔の建設、村民図書館の建築などの活動を実施してきました。

2011 年秋には、日本国際交流資金ニューデリーの支援の下、サンタルの村での滞在制作プロジェクト「8 人の日本人アーティスト：東洋との交感」、2013 年からは、インド農村での 2 度目のレジデンス企画“土のつわもの～masters of soli” (1 月～3 月)、サンタル人を日本に招聘し、共同で土の建築物をつくるプロジェクトを”六本木クロッシング “／森美術館、(8/20～9/23)” 瀬戸内国際芸術祭 “／本島、香川 (7/16～10/18) にて実施しました。

日本とインド双方を行き来しながら、エネルギーと生活、自然と文化芸術についての実験的試みを行い、近代社会における「新しい村」の形をインド少数民族の人々と共に模索してきました。

東日本大震災をきっかけとして、日本は今大きな転換期を迎えています。被災地では、今もお復興に向けての様々な取り組みがなされていますが、根本的に解決していかなければならない問題は震災から 2 年以上経過した今でも山積みであり、精神的にも困窮した人々が多くいることは明らかです。現代の日本は自然と人間関係を今一度改めて考える必要があります。私達にとっての本当に平和な社会とは何なのか。私達は現状に希望を見だし、既存の世界のみに囚われることなく、豊かな世界を共に想像していくための価値観や人生における指針を見だししていくべきだと考えてきました。特にこれからの未来をになう子供達には、現状に希望を見だし、既存の世界のみに囚われずに豊かな世界を想像し、人生における指針を見だし生き生きと暮らしてもらいたい。そのための舞台を大人が準備してあげる事は、今後の社会の在り方を考える上でとても重要な事だと考えております。

そのような経緯から、昨年度、貴財団様より助成をいただき、「TRANS ARTS TOKYO (神田、東京)」というアートイベントにて、福島美術予備校生を対象とした土や自然素材を用いたワークショップを実施しました。

本プロジェクトでは、被災地の子供たちを東京・神田で行われている神田コミュニティーアートセンタープロジェクト「Trans Arts Tokyo」(<http://www.kanda-tat.com/>)に招待し、ワークショップを行いました。会場内のサンタル族の農村を連想させる村を再現させ、土のみで作る建築工法や、伝統的な生活週間、料理の紹介等を行いました。

サンタル族の自然に密着した美しい伝統文化を紹介しながら、土などの自然物質を用いたワークショップ等をつうじて互いに密接に関わり合う中で、これからの未来を担う被災地の子供達の、現状に対する不安な気持ちを和らげ、希望をみだし、新しい平和のかたちを創造できるような精神的土壌を養うきっかけを生み出すことを目標としました。

また、今回は福島の美術学校の生徒を対象とした為、Trans Arts Tokyoという総勢300人を超える芸術家たちが集まる展覧会に参加し、多くのアーティストの仕事の現場や作品を間近で体験できる経験は、福島のこどもたちにとって非常に貴重な経験となりました。

## 実施日程

ワークショップ準備期間

2012年10月1日～11月15日

ワークショップ実施日時

(TRANS ARTS TOKYO 観覧者向け)

2012年10月31日、11月7日 \*観覧者が自由にプロマイノリティの村作りに参加するもの。

参加形態は自由。

(福島の生徒を対象としたもの)

2012年11月17日～18日の2日間

参加者 福島県郡山市、レモン美術研究所の生徒4名と同伴講師1名

ワークショップ実施スケジュール (福島の生徒を対象としたもの)

一日目

10:00 参宮橋駅前に集合。宿泊場所にチェックイン

11:00 昼食、自己紹介。

12:00 神田に移動。

13:00～14:00 プロマイノリティの制作現場にて、サンタル族の文化と土の建築工法の紹介

14:00～16:30 TRANS ARTS TOKYO の館内の紹介。多作家の作品現場を鑑賞する。

17:00～19:00 サンタルの文化、プロマイノリティのインドでの活動についての講演会に参加。

19:00 夕食場所に移動

19:00～21:00 TRANS ARTS TOKYO 参加作家等を交えた夕食会。

21:00 宿舎に移動

22:00 宿舎にて、開散

## 二日目

8:00 起床、朝ご飯

9:00 神田に移動

10:00～12:00 土壁用の土をねる作業等を体験。サンタルの伝統的建築工法についての理解を深める。

12:00～13:00 昼休憩。 インド料理を体験。

13:00～17:00 土や藁を使った作品制作。おのの自由で表現する。

17:00～18:00 感想。意見交換。

18:00 開散

## サンタル族について

インドの詩聖であり、アジア人として初めてノーベル賞を受賞したラビンドラナート・タゴール(1861-1941)は「自然と共生するサンタルの生活に私たちは学ばなければいけない。」と唱えました。インド最大の同族コミュニティですが、バングラデシュ、ネパール、ブータン など近隣諸国にも住んでいる。彼らの文化は口承、歌、儀式で維持、伝承されています。インドの貧困コミュニティの一つと見なされているが、素朴、正直、平和的、陽気な性格の持ち主で、独特の米ビールを好み、冗談好きです。その宗教はアニミズム的で、祖先の霊、家の霊、村ごとに保存されている原始林の霊など、霊魂(ボンガ)は至るところに存在します。

## プロマイノリティのサンタルの村での研究成果

### 『伝統的建築工法について』

サンタル族の伝統的建築工法では“土”がメインに使われています。彼らの家の壁面は殆ど土のみでつくられています。

制作の工程はまず地面を30cmほど掘り込み、そこへ水を流し込み地面を固くします。そこから一回30cmほどづつ土と藁と牛糞を混ぜて練ったものを積み上げていきます。直射日光が当たることが重要で、直射日光によって土が乾燥し固くなったら次のレイヤーを築きます。およそ3日に一度30cmづつ積み上げていくこととなります。日常の農作業等の間などに、少しずつレイヤーを重ね、壁を築いていきます。その後、竹で張りや屋根の構造を組み、藁を敷いて屋根を完成させます。床には“グリ”と呼ばれる牛糞と墨をまぜてつくられる伝統的塗料が使われます。これには彼らの神様“マラン

ブルー”が宿るものとされていて、サントルの女性は毎日このグリで床を磨きます。壁や屋根の補修も、日常生活の一部として行なわれます。稲藁も、米を主食とする彼らの周りには常にある物で、収穫、脱穀のシーズンには綺麗に束ねられて形良く積み上げられています。また稲藁を編んだものをぐるぐると大きく円柱状にまき、屋根をつけたもので収穫した米を保管しています。彼らの住環境は常に清潔であり、“家作り”と毎日の衣食住に伴う労働が1つのサイクルの中に完璧に組み込まれています。

現地には「ヒマラヤ下し」という暴風・突風が吹きますが、彼らの土建築はビクともしません。厚み50cmの土の壁は非常に重厚です。雨を気を付けなければいけないのは屋根の部分です。真上から来る雨にはかなりの圧力があり、トタンなどでも掘り込むほどです。よって屋根部分には茅や藁といったやわらかい繊維質の素材が有効なんです。逆に横からかかる雨には掘り込むほどの圧力はなく。底を長くし直接壁に雨がかからないようにすることで土の流れだしも制御することができます。水分は積み上げた土壁をより固くするほどで、制作過程における雨は多少かけるぐらいの方が丈夫になします。

#### ◎具体的な制作プロセス



土台を作る



土を積み上げていく



屋根の構造をつくる。壁の表面に牛糞のを加えた土を何層も塗っていく。



藁屋根を引き、壁に化粧塗りを施す



内部の様子



## 『サンタルの伝統的工法と、近代建築工法（アースバック工法）の融合』

アースバック工法とは、土嚢袋に土をいれたものを積み上げていくという、近年世界中で注目されている工法のことです。この工法を利用する事で、土を積み上げる作業の効率化をはかるります。また、この工法をつかうことで世界中様々な地域の土を高く積み上げる事が可能となります。



土嚢袋に土をつめる



積み上げながら構造を作る



上から粗壁用の土を塗ってい

きます。



アディバシの家（インド）

## 会場内に再現した“村”と、ワークショップ実施について

私達プロマイノリティはかねてよりインドの少数部族、サンタル族の伝統的建築工法や、自然に密着したライフスタイルのノウハウを、彼らの村で長期にわたって生活を共にすることで学んできました。彼らの文化やライフスタイルからは、私達日本人が過去に失ってしまったもの、今後の社会の在り方に付いて再考していくために学ぶべきものが多く見受けられます。また、それらは日本人がかつて営んでいた生活様式を彷彿させるようなものでもあります。

しかし、いくら素晴らしいといえども、すでに近代化された日本において過去に逆行するともいえるそれら生活様式の全てを甘受することは事実上不可能です。

わたしたちはこれまで営んできた文明、技術の全てを否定する事無く、サンタルの社会から学んだ英知を近代の文明社会にどのように組み込んでいけるかを、作品制作を通じて探求していくことに社会的意義を感じております。

今回の企画では、福島の生徒たちを招待して行なう体験型ワークショップの為に、TRANS ARTS TOKYO 会場内に、私達が提案する1つの村のカタチを再現しました。

会場の TRANS ARTS TOKYOは旧電機大学の跡地であり、すでに誰にも使われなくなった校舎の中の教室の1つにワークショップ用の舞台を設置する事となりました。室内はコンクリートそのままの壁面、むき出しとなり垂れ下がった配線コード、授業で使われていた机、椅子、などが乱雑においてありながら、非常に無機質な空間でした。そのような空間に土や竹を持ち込み、サンタルの村のような空間を再現する事は一種の挑戦のようなものでした。私達はあえて、教室にあった机や椅子などを意図的に使いながら、竹で構造体をつくり、土壁や藁屋根をひいて家をつくったり、天然顔料を用いて壁画をほどこしたり、ワークショップ体験者が食事を楽しむための床、調理用の釜などを制作しました。舞台の制作期間中は、TRANS ARTS TOKYOの一般の来場者対象として、公開ワークショップも実施しました。参加者は自由に会場での作業に参加し、“村民”として村作りをおこないました。

福島の生徒とのワークショップでは、サンタルの伝統的建築工法の紹介をおこないながら、再度土をこね、壁の化粧塗りをしたり、装飾をおこないました。





ワークショップ現場



藁を刻み、土をこね



室内の床面をつくる



机を使ってつくった釜



昼食は竹を用いインド式で。





土で自由に。



## プロマイノリティ代表、岩田による講演会の実施

ワークショップ参加者及び一般の来場者を対象とし、11/17日に岩田草平（Prominority 代表）による講演会を実施した。これまでサンタルの村で行なってきた事業（給水塔や図書館の建設やサンタルの村でのレジデンス事業）の紹介、サンタル族の文化、伝統、生活様式等の紹介をしながら、現代社会において、少数部族の人々と我々現代人が交流し、共同で事業をおこなっていくことにどういった可能性を見いだす事ができるのか言及しました。サンタル族の土を使った伝統的建築工法と近代工法（アースバック工法）を織り交ぜて建築物をつくるメソッドを紹介する事で、自然に寄り添う新しいタイプの家作りの仕方を紹介しました。

また、サンタル族の家作りに関する根本的なスタンスと価値観と近代建築の方法論とを比較していくことは、現代人のライフスタイルの在り方に関する根本的な投げかけを伴う議論へとつながっていきました。参加者との質疑応答も盛んに行なわれ、質の高い講演会を実現させることができました。

また講演会には、2013年1月よりインドで行なわれたレジデンス事業「土のつわもの～MASTERS OF SOIL」に参加予定作家の大木裕之、三梨伸も来場し、参加者とのコミュニケーションを楽しみました。





## 【TRANS ARTS TOKYO（トランス・アーツ・トーキョーについて） ＊WEBより抜粋

神田コミュニティアートセンタープロジェクト『TRANS ARTS TOKYO』

実施日時：2012 年 10 月 21 日（日）～11 月 25 日（日）12:00－19:00（最終入場 18:30、火曜休）

会場：旧東京電機大学校舎 11 号館ほか（東京都千代田区神田錦町 2-2）

主催：東京藝術大学（美術学部 絵画科 油画専攻） 共催：神田コミュニティアートセンター構想委員会（委員長：佐藤一郎（東京藝術大学美術学部絵画科長））

運営：一般社団法人非営利芸術活動団体コマンド N（東京都千代田区外神田 6-11-14） 協賛：住友商事株式会社 株式会社大林組 他 後援：千代田区 協力：アーツ千代田 3331

参加アーティスト：岩田草平(Prominority)／大木裕之／O JUN／佐々木耕成／椿昇／林加奈子／日比野克彦／福田美蘭／藤浩志／村山修二郎／和田昌宏、他多数。

## 「TRANS ARTS TOKYO スタディツアー」について

『TRANS ARTS TOKYO』は、東京藝術大学主催のもと、東京・神田の旧東京電機大学校舎 11 号館で開催されました。

神田の街に新たなアートセンターを設置するためのプロジェクト『神田コミュニティアートセンタープロジェクト』の一環として開催されるイベントで、移転した東京電機大学の旧校舎全フロアを使用し、現代美術やデザイン、パフォーマンス、写真、建築、ファッションといった様々なジャンルの作品展示やトークセッション、プログラムなどが展開されていました。

会期中には様々なプログラムが実施されていました。地下 2 階から地上 17 階までの全フロアに、300 名と越えるアーティストの作品が展示されており、非常に見応えのある展示となっていました。私達プロマイノリティのワークショップ現場の同フロアの 3 階にはコミッションワークアーティストとして、福田美蘭、藤浩志、O JUN、大木裕之らの展示が並んでいました。

スタディツアーは 3 階から始まり、17 階から地下 2 階まで館内を一周するものとなりました。所々展示スタッフによる説明などをはさみながら作品を鑑賞しました。フロアごとにセクションや表現メディアが別れていたため、皆で一周した後は個々に興味があるフロアに別れて鑑賞しました。ワークショップ参加者は油画、日本画専攻での美術大学の受験を志す方達であった為、東京芸術大学の博士の方たちの展示フロアは特に興味深く鑑賞されていたようでした。

スタディツアーの後は、プロマイノリティスタッフを交えてアートの在り方についての盛んな議論がなされました。次の世代のアーティストの卵である彼らにとって貴重な経験となってくれたように感じることができました。

## 活動の成果

“TRANS ARTS TOKYO”のなかでも本プロジェクトは“コミッションワーク・アーティスト”の活動として3Fのメインフロアで紹介され、各種メディアにも大きく取り上げられました。これまで私達プロマイノリティは主にインドでのみ活動してきましたが、サンタル族のような第三世界の人々×現代人のコラボレート企画としてのプロマイノリティの活動を日本で実践的に開始し、それをよりパブリックに波及していく為の足がかりになるものとしてより意義のある企画を実施できたと考えております。また活動による成果としてより精神的な意味合いをもつもの、福島の子供たちの精神的負担を軽減し、美術大学へ進学を希望する彼らに対して現実的な希望をもつ機会を提供することができたと考えております。

東日本大震災を経て、自然との人間との関係をみつめ直す機会が訪れている今、土に直に触れ、住環境と人間の在り方について感覚的に思考できる経験は現代社会では希有です。そのような機会を設けられたこと、またその成果、精神的共有を多くの人と共有できた意義は大きいです。

またこの活動の成果によって結果的に、2013年度の六本木クロッシング、瀬戸内国際芸術祭においてサンタル人を日本に招聘することを可能とし、さらに社会的波及効果の高い活動につなげることが出来た点も、大変すばらしい成果であると考えております。

## 今後の課題

今回は資金的な理由により、受け入れられるワークショップ参加者の人数に限りがありました。今後はもっと大きく、一般の方々が気軽に自由に参加できるようなものにしてきたいと考えております。そのような意味では、この事業をきっかけに参加が決定した2013年度の六本木クロッシング、瀬戸内国際芸術祭では、より大きな広報効果と社会的波及効果は得られたと考えております。イベント運営に限らず、より継続的な活動を目指すために、経済的な自立による資金源の確保、広報方法の体系化等の運営上の課題はあります。国内でより広域的で意義のある活動をするためには、地域コミュニティに関するリサーチ、特に被災地の現状やイベント参加者に対するヒアリング等もより強化して行なっていきたいと考えております。また、インドのサンタルの村との交流も引き続きおこない、日印にとって互恵的な活動であり続ける為のアイディアを常に生み出していきます。いっそう高いレベルでアートを通じて社会に貢献できる団体であり続ける事を目指してまいります。

